

「小さな村の物語 イタリア」

伊地知 龍清（3組）



三年程前からBS日テレで、土曜日の夜九時からと日曜日の朝十時からの一時間番組「小さな村の物語」を心待ちにしている。

一回に一回くらいは再放送だが、村人達（主人公は二人の時が多い）の平凡で誠実な暮らしとバックに流れるカンツォーネに魅せられて、飽きずに見入っている。この番組は二〇〇七年の秋に第一回が始まり、昨年末迄に百六十三回を数えているが、諸姉・諸兄の中にはもっと以前からご覧になっておられる方も多いと思う。

北はアルプスの麓から南のシチリアまでの人口数百から数千人の村人達の暮らしは多様である。長い歴史を持つ村々は必ずと言っていい程、山の中腹や丘の頂上に村で最も高い鐘楼が目につく教会を中心に、近隣の村々とは山林、草原、農地などで隔絶されて佇んでいる。

番組の主人公は農夫、村役人、自動車整備工、教師、主婦、牧童等々多岐に亘り、経済的には然程恵まれていなくとも家族・友達・隣人とお互いに助け合いながら、その村に昔から伝わる慣習を重んじ、その村独自の手作りの祭りを催したり、教会に夫々の楽器を持ち寄って演奏会の稽古に励み、ある村では猪狛を企てたり、村の雑木林の一部を伐採して、暖炉にくべる薪を夫々の家で分け合って冬に備える。

身寄りのない老人には、近隣の村人達が交代で援助の手を差し伸べる。こうして日々の生活に楽しみを見つげながら淡々と暮らしている。誠に健気である。

実は小生、遠い昔、一九七〇年四月から翌年の一月までの凡そ十ヶ月間、イタリアの南部のバジリカータ州・ピステッチ・スカロに、合成繊維・縮重合設備の建設と操業の立ち上げの仕事で滞在した事がある。

因みにスカロには波止場の意味があり高地ではない。そしてスカロにある工場で働く従業員は、スカロの付かない高台にあって、昔からの村・ピステッチから工場へバスや車で通勤していた。このスカロには鉄道の駅、高速道路のインターチェ

ンジ、レストラン付のモーター位しかなく、我々プラントの建設・操業支援する日本人チーム（多い時で十人、少ない時は小生一人）はこのモーターに居住して、レンタカーのフィアットで国際免許証を持参した小生の運転で通勤していた。

仕事の方は日本の様には計画通り進まず、いらつくことが多かったが、高々数ヶ月の工期遅れなどは、悠久の歴史を誇り、日常生活も大事にする彼らにとっては然程の問題ではなかったのだろう、と今にして思うのである。

ところでイタリアにいた時、なぜ不便な高台に集落があるのか不思議に思ってた事がある。その答えは、一、遠い昔、海賊の襲来に備えた。二、伝染病の蔓延から逃れる、の二つであった。

今にして思うと、もう一つ「彼らの街・住居が石積みで、長い時と多大な労力を費やして作られ、自分達の先祖が残してくれた物への愛着」もあるに違いない、と思う。現に「物語」の一つに、壊れて百年間も使えなくなっていた教会のパイプオルガンを数年掛りで修復して、村人達に大変喜ばれた若者もいたし、年代物の農機具・織機・車など上の世代から引き継いだ道具を捨てきれずに使ったり、物置に保管している例は枚挙に暇がない程である。

この「物語」に我が懐かしのピステッチが登場する事は先ずあるまいと思いつ、今年もイタリア各地の村人達の素朴な生き様に新たな感動を覚えることだろう。

